

「私のまちへの関わり方—記録する、活用する、共感する」

●講演者: 謡口 志保 氏

●参加者数: 会場10名+オンライン18名

今年度の研修委員会事業は、1年を通した4回の連続企画です。講師には、前もって共通テーマを挙げて、それに応える形でご講演頂きます。共通テーマは、「まちを見つめる建築家」。主旨は、「建築という社会と密接に関わり合うこの分野には、独自の視座を持つ建築家がいる。東海地方で活躍している建築家の“生きた”お話を聴く企画」です。

第1回目の今回は、謡口志保氏にご登壇頂きました。氏がまちと関わる手法として、「設計する」「記録する」「活用する」「共感する」の4つに整理されており、そこから特徴的な3つについてお話しされました。

○記録する—編集者・研究者として

『渋ビル手帖』は、すでに累計2万冊弱を発行した自費出版本です。小冊子ながら充実度が高い渾身の記録集で、掲載されているものは渋ビルと名付けられた、極く普通のビルです。有名建築家によるものだけでなく、見過ごされてしまいそうな古い建物が対象で、褒めて愛でて撮影する街歩き集団を名古屋渋ビル研究会と称しました。路上観察学会さながらで、今では取り壊しの危機に面しているかもしれない近代建築を、溢れる数の写真とユーモラスなイラスト、洒落た記事やキャプションによる紹介は、思わず微笑んでしまいます。



謡口 志保 氏

○活用する—運営者として

近代建築への愛情は、見るだけでなく活用にもつながっていました。

1例目は、一宮市に80年を超えて鎮座してきた旧尾西繊維協会ビルの文書庫の活用事例です。一宮市は以前に繊維で発展した尾州産地の中心です。ここに、インスタレーションや展示を行う創造空間としての利用を企画されました。渋ビルをデザインの発信拠点として、新しい人・会社・創造を呼び込み、古き良き時代から新しい時代へ導く意欲的な運営を提案されています。

2例目は、東京の千駄木にある古民家をリノベーションした事例です。戦火を潜り抜けたこの界限は下町情緒が残る。築100年の一軒家を使って昔の記憶を呼び戻し、人と街と物を繋ぐ「小さな窓口」になることを意図されています。地域に向けて“窓”を開ける方法は、実測の後の改修工事から始まり、主な仕上工事は仲間とセルフで行われました。完成後は、事務所+住まい+レンタルサロンとしてオープンし、着付けや絵画、お花の教室など暮らしとの繋がりを自らの手で試みられています。

○共感する—企画者として

記録するには事前に調査が必要となり、活用を維持していくにはそれなりの動員も大切になるでしょう。一宮せんい団地では、国の店舗等集団化事業により1971年に完成され、今も膨大な図面・資料が残ります。それを基に渋ビル手帖を作成。その手帖に触発されて、団地の活性化委員会からお声がかかり、渋ビル散歩(見学会)の企画がなされ、人目を引くマルシェやキッチンカーなどの効果と相まって、2,000人の集客に成功しました。また、氏の出身地である鳥取市での取組では、一部しか利用されていないプラザ佐治という豪雪山村開発センターを、手帳から始めてシンポジウ



渋ビル手帖とmapの宝典

ムを開催し、建物見学会を行ないます。ポテンシャルを市民と共有しながら、新しい活用方法を見出していくというまちおこしの起爆剤的役割を担っています。

氏の3つの手法は、あまり目を向けられなかった渋ビルに視点を当てただけでなく、その建築が出来上がった理由や設計意図を汲み上げて皆と共有するところに、卓越した視座をもつと思われる。この過程は窺い知れないですが、とてもハードであろうと推察されます。氏が語るようにまちの主演は、「建築」と「そこを守る人」であり、その理念を忠実に実践しながら、一つずつ丁寧に手間をかけて建物の魅力を引き出していく姿勢は、今や多くの建築家が忘れつつある大切な立脚点です。

最後に、まちづくりに携わってきた先輩建築家から、この活動が一過性でなく後継していくような仕組み作りを期待され、氏の今後の活動にエールを送られました。

奥野 美樹 (JIA三重)

奥野建築事務所

